

2008/9/11(木) 午後 9:26

無題

練習用



0

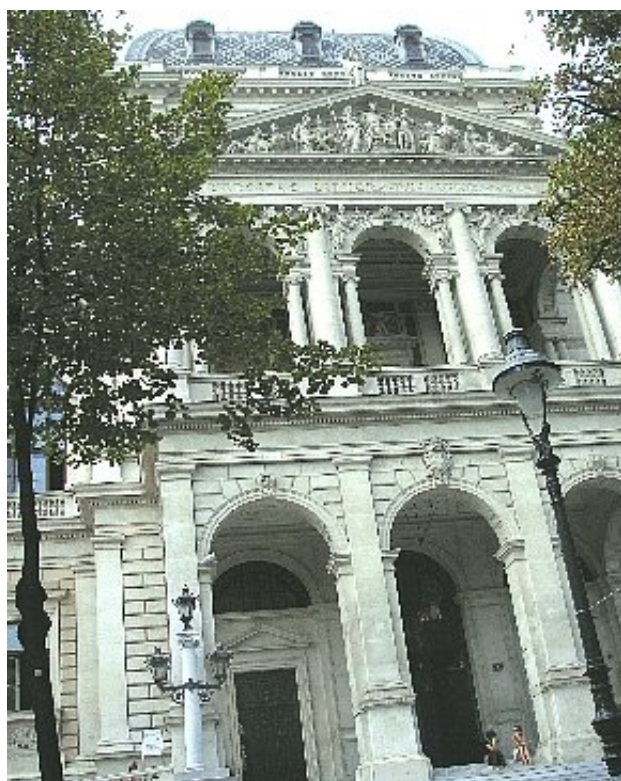






写真: 上より、ウィーン大学正面、ノーベル賞受賞者パネル、ウィーン大学回廊、夫妻のアパート外観、3階14号室のドア、マリアンネ通り1番地付近、ポリクリニック正面、旧ドナウと昇る朝陽、新ドナウと山並み、新ドナウと国連都市、ドナウ本河観光船船着場付近、ドナウ運河スエーデン橋から。

N&Fです。旅の3日目は自由行動日、私たちは

- 1) クリムトの絵を見たくてオーストリア美術館
- 2) リングを半周してウィーン大学
- 3) フランクル夫妻が住んだ街をこの目で見たくてマリアンネ通りと歩き回りました。

みなさんには 2)ウィーン大学 と 3)フランクルが住んだ街をレポートいたします。

【ウィーン大学散歩】

ウィーン大学は1365年プラハのカレル大学に対抗して創立された。そのころの神聖ローマ帝国はボヘミア・ルクセンブルク家のカレル4世が皇帝であり、プラハは帝国の都として絶頂期でもあった。カレル4世は1348年プラハにカレル大学を創立、新興の都プラハを文化の中心地たらしめようとした。長い間帝国の中心であったウィーン

のハプスブルグ家ルドルフ4世はそのことが我慢ならず(俺の想像だが)ウィーン大学を創立したという訳だ。
いまでもドイツ語圏最古最大の総合大学とされているからベルリン大学やミュンヘン大学よりも格式が高いのかもしれない。ノーベル賞受賞者も11名(Wikipediaによる)輩出している。大学の正面玄関に入るとノーベル賞受賞者の写真が掲げられていて、次は誰?とばかりに?マークの パネルが掲示されている。学生への意欲付けのつもりだろうが、大学の過去の栄光のノスタルジアとも受け取れて、大学の品位を落としかねないと俺には思えた。しかし大学の回廊は見事であった。その時代に貢献した卒業生の胸像・レリーフが廊下・柱・壁に所狭しと並べられている。俺が知る人物は誰一人いないが、その道の者ならば彼らの業績を考えるだけでも何かを得ることができるのではないか。アカデミックな雰囲気には包まれるとはこういうことを言うんだと回廊を廻りながら思っていた。

フランクルの父ガブリエルもウィーン大学医学生だった。5年在籍し最終総合試験を残すのみでありながら経済的な理由で断念している、1883年のことだ。もうすこしの我慢、きっと経済的理由だけだったとは思えない何かがあったのだろう。父親は医学部近くの仕事のとき7.8歳のフランクルを解剖学研究所に連れて行ったそうだが、いまのヴェーリングガー通りに面した病理解剖学博物館辺りではないか。そこから流れてくる独特の臭いをフランクルは好んだそう。たぶん人体標本保存用のホルマリン液であろう。あんないやな臭いを好むとは…俺とはそもそもこのころで大きく違っていたようだ。

フランクルは1924年ウィーン大学医学部に入学、30年医学博士号を取得した。当時大学研究職の階段を閉ざされていたユダヤ人の常として、臨床の道を歩むことになる。このことが結果としてロゴセラピーを花開かせることになるのだから、人類にとってとても良かったと言えることになる。そんな風に一度は閉ざされたウィーン大学から1986年名誉博士号を授与されている。晩年はノーベル賞に推されていたそうだが、フランクルはそんなこと一向に気に掛けていなかったに違いない。

【フランクル夫妻が住んだ街】

ウィーン大学の角をアルザー通りに折れて2つ目の大きな交差点を右折して最初の通りがマリアンネ通りですよ、と地図と目の前の道路とを合わせながらゆっくりとした坂道を上がっていく。そうそう、この角ですね右に曲がりましょう、100mも歩いたらうか、Mariannen 9 の住居表示板が飛び込んできた。間違いないですよ、さてどちらの方向に行くのかなあ、何番地でしたっけ? 1 番地 1 番地! とにかく近くに来てますから歩きましょう。番地が下

がっていますね、と左右をきよろきよろしながら歩を進める。おっ！これはポリクリニックではありませんか、これだよ・これ、へえークリニックというから小さな建物を想像していたけど、意外に大きいですね。まずは写真を撮りましょうか。こうして我々はポリクリニックを探し当てたのである。

さて本命のフランクルのアパートですね、さらに下っていく。こんなに歩くのかなあ、通りに出てしまいますよ、あっ！ここは2番地、とすると反対側では、ありました・ありました Mariannen 1 が、間違いなくここですね、この建物ですねと見上げる。思った以上に大きく白く美しい建物である。ここから先は深津さんも俺も自由行動、それぞれの思いを果たすべく写真を撮ったり見上げたり壁に触ったり、至福の時間が流れていくとはこのことではないか。深津さんはシュピタル通りから上部階方向にしきりにカメラを向けている。フランクル夫妻の部屋は3階14号室、二人が出会ったところエリーがつくったガーゼの投げ縄をフランクルは窓からぶら下げていたんだ、その窓はどれかと…。Fさん、この旅で同室してエリーの追っかけと分かってはいたが、これほどとは…絶句。もともと好奇心が目に見えているFさん、いっそう妖しげな光を帯びてスーカークっぽくなっているのが、ちょっと怖かった。

ウィーンに帰った1945年9月に住み、46年2月にポリクリニックに着任、47年7月に結婚式を挙げ、爾来亡くなるまで終の住処としたこのアパート、フランクルとエリーのすべてが凝縮している。それにしてもごく普通のアパート、ここに市井の人たらしとしたフランクルの人間性を感じるのである。(M.N.記)

【2日目早朝のドナウ川散歩】

「ドナウを歩こう」ウィーンに着いた夜どちらともなく言いだし、翌朝さっそく実行された。T.F.さんは、エリーが育ったカイザーミューレンを見たい・エリーが歩いたポリクリニックまでを自分の足で確かめたいと言う、完全な追っかけだ。俺はドナウ川を見ずしてヨーロッパを語るな、という一端の歴史家気どり、ただのミーハーだけなのだ。共通点は年をとった酒飲みということである。

ドナウはウィーンの辺りでは運河・ドナウ本河・新ドナウ・旧ドナウと並んで流れている。どうせ行くなら旧ドナウ、そこからこの道を歩けば市内に戻れるはずと地図で当たりをつける、まだ明けきらぬ闇のなか地下鉄に乗り、Alte Donau 駅で下車、そこで旧ドナウに架かる大橋を渡る。おりしも朝陽が昇り、旧ドナウは光と影の世界につつまれ、その美しさにしばし声も出ない。

大橋を戻って左折すればカイザーミューレン、深津さんの顔が上気している、まるで恋人に会うかのごとくに、きつと純情なのだ。カイザーミューレンは瀟洒な邸宅が並ぶ落ち着いた街並みだった。目ざとくSPAを見つけた深津さん、今夜の酒を仕入れようと言いだす、買っておけば安心だからと。まだ朝の7時過ぎ、この人の頭の構造はどうなっているのだろう。シュティゲルのビンビール2本とワイン720mlを鞆に無造作に突っ込み、意気揚々と歩きだす。

国連都市の辺りでドナウ本流を渡る道がどうしても見つからない。そんなバカなと思いつつ、じゃあここだけショートカットでとKaiserm-Vienna Int. Centre 駅で乗車、新ドナウを渡る。新ドナウとドナウ

本河の間は中道が通っていて、Donau-Insel 駅がその上にある。地下鉄のドアが開いているときT.F.さんが、ここで降りて写真を撮ろうと言いだす。空は晴れ上がり、西の上流方向に山並が美しく見える。お一つ、地下鉄の側道を自転車走っているぜ・これを行けば市内に戻れるぜ。深津さんのこの感の良さは動物的、我々はこうしてドナウ本河を渡り、プラタナスの並木道を、フランクルが育ったレオポルドシュタットに向けて歩きだしたのである。

プラーターの大観覧車を遠くに眺め、このPraterstern のロータリーの出口の方向を間違えなければ、運河を渡りリングに出ますよ。案の定、間違えたらしく我々の居場所が分からない。聞きましょうか、できれば若い女性がいいですね。天は我々を見捨てなかった、なんと姉妹だろうか・美人の二人連れが犬を牽いて我々の目の前に現れたのだ。信じられない!! 元気にブローケン英語で尋ねる我々、年はとっても男なのだ、お互いに。

こうして楽しく難局を乗り越え、エリーが歩いたアスペン橋ではなかったがドナウ運河を渡り、地下鉄 Schwedenpl 駅から帰還できたのであった。この距離 6km 150分間の小旅行、「我々はドナウを制覇したぜ」と二人で快哉を叫んだのである。(M.N.記)